テレビマンとしての矜持を胸に 高視聴率ドラマを次々と生み出す

石丸彰彦氏

TBSテレビ　プロデューサー

Ishimaru Akihiko_1974年静岡県生まれ。中央大学経済学部卒業。1997年TBSテレビ入社。バラエティ番組『学校へ行こう！』ディレクターなどを経て、2003年『STAND UP!!』でドラマプロデューサーとしてデビュー。代表作に『世界の中心で、愛をさけぶ』（2004年）、『白夜行』（2006年）、『華麗なる一族』（2007年）、『ROOKIES』（2008年）、『JIN-仁-』（2009年）など。愛妻家で一男一女の父親でもある。

TBS開局60周年記念
日曜劇場『JIN-仁-』
東京ドラマアウォード、ギャラクシー賞をはじめ国内外の賞を33冠達成した連続ドラマ『JIN-仁-』の続編。2011年4月17日より放映を開始。
公式ホームページ
http://www.tbs.co.jp/jin-final/

CAREER CRUISING

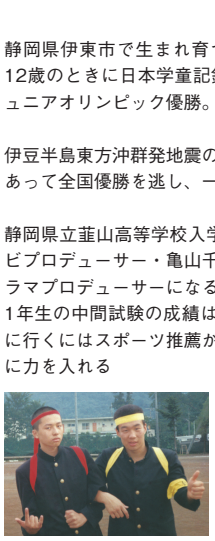
キャリア・クルージング

Interview = 泉 彩子、大久保幸夫
Text = 泉 彩子（56～58P）
大久保幸夫（59P）
Photo = 刑部友康

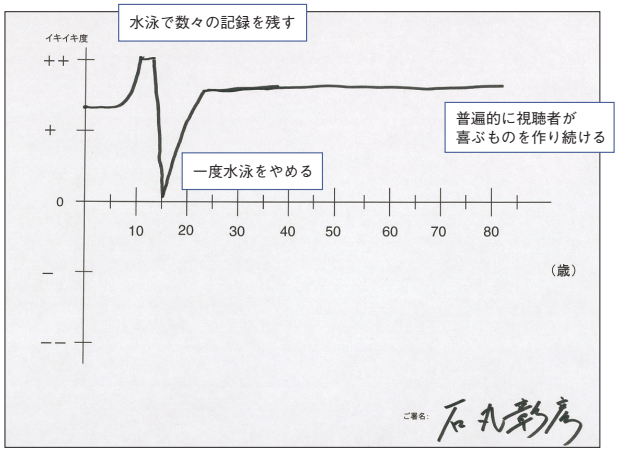
キャリアとは「旅」である。人は誰もが人生という名の旅をする。
人の数だけ旅があるが、いい旅には共通する何かがある。その何かを探すため、
各界で活躍する「よき旅人」たちが辿ってきた航路を論考する。

石丸彰彦氏　キャリアヒストリー

1974年	0歳	静岡県伊東市で生まれ育つ。6歳で水泳を始め、12歳のときに日本学童記録樹立。14歳で全国ジュニアオリンピック優勝。学業も優秀だった
1989年	15歳	伊豆半島東方沖群発地震の影響による練習不足もあって全国優勝を逃し、一度水泳をやめる
1990年	16歳	静岡県立韮山高等学校入学。同校OBのフジテレビプロデューサー・亀山千広氏の講演を聞き、ドラマプロデューサーになることを決意する 1年生の中間試験の成績は350人中330位。大学に行くにはスポーツ推薦が近道と考え、再び水泳に力を入れる
1993年	18歳	スポーツ推薦で中央大学入学。水泳部に在籍し、寮生活で仲間との友情を育んだ。一方、テレビドラマは片っ端から観て感想を記録していた
1997年	23歳	TBSテレビ入社。バラエティ番組AD、ドラマADを経て、2001年バラエティ番組のディレクターに。私生活では23歳で結婚。妻とは学生時代からのつきあい。ADの仕事が忙し過ぎて会えず、「これは結婚するしかない」と考えたという
2002年	28歳	ドラマの部署に戻る。2003年『STAND　UP!!』でプロデューサーデビュー。『世界の中心で、愛をさけぶ』『白夜行』などヒット作を生み出す
2007年	33歳	番組の編成を行う部署へ異動。全社的な番組改編に伴って『ROOKIES』の企画・プロデュースを担当。最高19.5%の高視聴率を獲得
2009年	35歳	編成時代から企画・プロデュースを手がけていた『JIN-仁-』が放映されるタイミングでドラマ制作の部署へ復帰。同作は民間放送連盟最優秀作品賞、橋田賞などドラマ界の栄誉ある賞を多数受賞



体育祭では応援団をやるなど高校生活を満喫。このとき既にプロデューサーになることを決めていた（写真右）



少年時代の水泳での挫折が底辺で、TBS入社後は高め安定。「激情型ではないですね。物事に一喜一憂したくないという気持ちもあります」と石丸氏。

TBSテレビのプロデューサーとして、『華麗なる一族』『ROOKIES』など数々の人気ドラマを手がけてきた石丸氏。2009年10月に放映された連続ドラマ『JIN-仁-』の最終回視聴率25.3%は、同年の全民放局ドラマのなかで最高視聴率を記録。2011年４月より同作の続編が「完結編」として放映され、再び話題を集めている。

バラエティも経験した20代
人生にムダはないと感じた

記録を残し続けていた水泳で、全国優賞を逃がし挫折を味わった。水泳の才能に限界を感じていたころ、フジテレビの名プロデューサー亀山千広氏の講演を聞き、現在の仕事を志した。高校１年生のときだ。

「プロデューサーの仕事を、『ある女優さんと俳優さんにキスをさせたいと思ったとき、それが実現できる職業』と説明されたんです。亀山さんの話しぶりが面白く、『ドラマのプロデューサーになる！』と。家族や彼女にも宣言し、なれないはずがないと思っていました」

大学進学後は水泳部の活動に打ち込んだが、ドラマのチェックは怠らなかった。就職活動ではフジテレビとTBSテレビに応募し、TBSテレビに入社した。

「フジテレビに落ちたときはびっくり。亀山さんに憧れ、すっかり入社するつもりでいましたから（笑）」

入社後３年間はアシスタントディレクター（以下AD）としてバラエティ、ドラマの順に担当。激務の日々だったが、苦には思わなかった。

「修業期間だと思っていましたからね。ただ、１時間の番組を作る大変さは実感しました。それから、１年目のバラエティ時代はロケよりも本社での業務が多く、会社の仕組みや視聴者対応など放送に携わる者としてのイロハをじっくり学べた。これは貴重な経験でしたね」

また、入社１年目にして制作会社のスタッフを含めた20人のADのチーフを任され、立場や年齢も異なる人たちを束ねる難しさも感じた。

「みんな僕よりも経験豊富な人ばかり。まとめるには腹を割って話して、信頼関係を築くしかありません。だから、毎晩のように飲んでました。もちろん自腹です」

入社２年目にドラマ制作部へ異動し、「いよいよ」と張り切ったのも束の間、再びバラエティの部署へ異動。内心、もうドラマが作れないのではと落ち込んだという。

「でも、人生にムダはなかった」と石丸氏。バラエティではドラマより限られた時間でテンポよく視聴者を笑わせ、飽きさせない工夫が必要だ。メリハリのある構成の仕方や、間合い、編集の重要性などを勉強したことが、後にドラマを作るにあたって独自の強みとなった。

ドラマの現場から編成局への異動が人気ドラマ『ROOKIES』を生んだ

2002年にドラマ制作の現場に戻り、翌年に『STAND UP!!』でプロデューサーデビュー。以後、既述のように人気作を連発してきた。なかでも石丸氏の名を業界に知らしめたのは、2007年に編成局に異動した後に制作した『ROOKIES』（2008年）の爆発的なヒットだろう。編成局とは番組表を組んだり、各部署の番組の企画を通すかを判断するなど会社全体の番組戦略を行う部署だ。

「編成局の仕事はTBSの全番組をプロデュースするようなもの。実は『ROOKIES』も、この異動で番組表の大きな改革にかかわったからこそ生まれたんです」

石丸氏が異動した当初、編成局では土曜日夜８時の枠の視聴率低迷が課題となっていた。『８時だヨ！全員集合』の系譜を継ぎ、バラエティが放映されてきた枠だ。

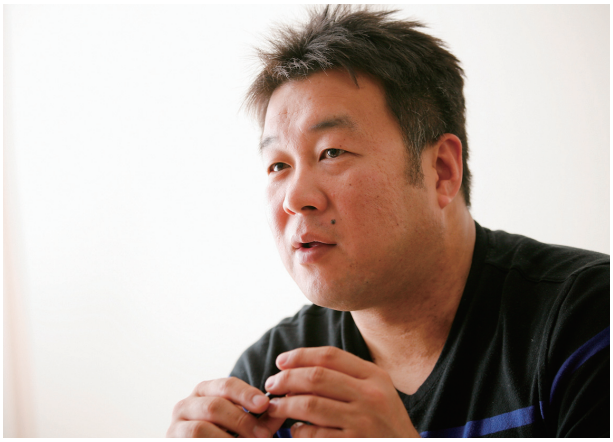
「そこでつい『ドラマなら、視聴率10％を狙えるものが作れます』と言ったら、編成局の人間は必ずしも番組制作の現場に入らないのですが、自らプロデュースすることに。負けられない戦いで、プレッシャーは相当なもの。原作を選ぶにあたり、僕自身を鼓舞してくれるような勢いのある作品がいいと考えたとき、５年前に若手俳優の勧めで読んだ『ROOKIES』が思い浮かんだんです」

社内でも極秘の大きな番組改編だったため、誰にも相談できず、出演者へは放映日時も伝えぬまま熱意で交渉。信頼できるスタッフをかき集めて、プロモーション戦略も綿密に立てた。ようやく迎えた第１話の視聴率は12.2％。目標をクリアし、「責任を果たせた」とホッとした。

「第２話で14.8％に伸びたときは涙が出ました」

その後も回を重ねるごとに視聴率は上昇。同作以降の作品でより高い視聴率も取ったが、「あの瞬間は生涯忘れない」と振り返る。

『ROOKIES』に続く大ヒットとなった『JIN-仁-』は幕末が舞台。時代劇の制作は長年の夢だったが、『JIN-仁-』以前に時代劇の企画をしたことはなかった。



「時代劇には予算もかかりますから、よほど説得力がないと企画が通らない。キャリアを積み、自信をつけてから挑戦したいと、機が熟すのを待っていました。また、これはどの作品もそうなのですが、１話から最終話まで筋書きがイメージできるまでは企画を出しません。自分でも呆れますが、完璧主義者なのかもしれませんね」

長年の信頼関係を築いてきたスタッフや俳優を起用することが多いのも、「暗黙知」を共有できる環境を作ることが、完璧な作品を生むと考えているからだ。

原作をそのまま再現するなら、ドラマを作る意味がない

ドラマを作るうえでは「小説や映画とは違うものを作ること」を意識している。『ROOKIES』は自らの手で映画化したが、「物語はテレビで完結しており、あくまでも映画は“意味のある”オマケ」と言う。

「『JIN-仁-』の第１シリーズは謎を残して終了したため、映画化も噂されましたが、ありえません。僕はテレビマンだし、映画化すれば、謎の解決が有料になってしまう。それは許されないでしょう」と熱く語る石丸氏。この矜持が独自のヒット作を生み出す原動力となっているのだろう。また、石丸氏の作品の共通点は、情熱的に生きる日本人が描かれていること。その根底には、「時代が変わっても、人の心は変わらない」という思いがある。

「そのときどきの視聴者に喜ばれるものを考え続けてはいますが、答えは誰も教えてくれません。結局は普遍的かつ自分がやりたいものを、『あの人なら、喜んでくれるかな』と身近な人の顔を思い浮かべながら形にしていくしかない。これはこの先も僕の鉄則でしょうね」

■ 石丸彰彦氏のキャリアをこう見る

「ロールモデル」「成功体験と挫折体験」「信頼できる仲間」から生まれる絶対の自信

大久保幸夫
ワークス研究所　所長

私が石丸氏にいちばん聞きたかったことは、その自信はどこから生まれてくるのか？ということだった。

現在のドラマ制作における絶対的な自信もそうだが、就活の経験もそうだ。彼は高校1年生でドラマプロデューサーになると決意して、大学卒業時にTBSテレビとフジテレビの2社を受けるが、フジテレビは不採用だった。そのときは「びっくりした」という。数百倍という難関にもかかわらず、受かると信じて疑わなかったのだ。大変な自信家である。

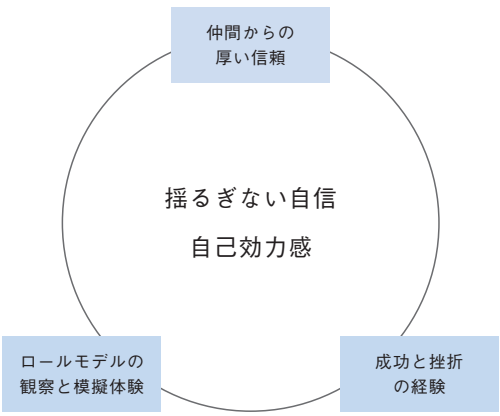
インタビューで理解したその理由は3つ。

1つめは、亀山千広氏という明確なロールモデルがいたこと。高校・大学時代も彼の姿を追いかけながら、ずっと「石丸ノート」という、制作者の目で見たドラマの記録をつけていた。

2つめは成功と挫折の両方を経験したこと。ドラマ制作で得たさまざまな賞や、勝負どころで得た高い視聴率などもあるが、原点は水泳で経験した栄光であり、挫折である。

3つめが、極めて強い仲間関係だ。大学時代の水泳部の仲間とは今でも頻繁に連絡を取っており、ドラマづくりに苦言を呈されても、素直にそれを聞けるほどの関係だという。仕事では、『世界の中心で、愛をさけぶ』を制作したときに集めた当時20代の演出家、脚本家、音楽家などのスタッフだ。そのときオーディションで見出した女優の綾瀬はるかさんは、その後も『JIN–仁–』をはじめとして石丸氏がプロデュースした数々のドラマに出演しているが、石丸氏は「彼女はプロデューサー人生の象徴であり、一緒に生きてきた人」と言い切る。今回の『JIN–仁–』の完結編も、そのままのスタッフで制作している。気脈の通じた仲間でものを作る、という彼なりの人間関係の作り方がそこにはある。

社会学者のバンデューラは、まだ体験していないことでもきっとできると思う感覚を「自己効力感」と名付けた。石丸氏の人生や仕事スタイルは、まさしくその自己効力感を生みだすプロセスとなっている。

「根拠のない自信」と石丸氏は笑うが、いや相当に「根拠にあふれた自信」の持ち主であると感じた。

◆ 石丸氏の自信の構造